

研推だよりNo.3



令和4年
5月2日
研究推進部会

先日の研究全体会では、**今年度新たに東京女子体育大学准教授の石出勉先生をお招きして御講演をいただきました。先生方も御参加ありがとうございました。**石出先生からは、今年度の研究を進めていく上での沢山の御示唆をいただけたと感じていますが、先生方はいかがだったでしょうか。

内容としては、GIGAスクール構想が進められるようになった社会的背景や、ICTを活用した仕事の効率化など概論的な部分についてお話しいただく一方、後半では実際の学習に即したタブレット端末の活用方法などを教えていただきました。これを今後どのように本校の研究に生かしていくのか、研究推進部でも検討していきます。来月からは研究授業も始まってまいりますので、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。以下、講演の記録です。

1 第2回研究全体会記録（文責：中島）

1. 講演 講師：石出勉先生（東京女子体育大学准教授）

1. 研究を進めるにあたって

- ・「研究のゴール」はどこにするのか？またそのために何ができればいいのか？阻害する要因は何なのか？今できることは？これを一つずつ明らかにしていく必要がある。
- ・何ができればいい？→協働して活動すること、考えを表現すること
- ・阻害する要因は？→キーボード入力→1分間に50文字（目安）、クラウド活用の経験蓄積
- ・今できることは？→

2. 「GIGA 構想とは？」

- ・1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する（文科省より）
- ・高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する（これから入ってくる）⇒これらはクラウドの活用が前提になっている。

3. 「Society5.0」の社会へ

- ・情報の方がAIを使って人間にアドバイスをしてくれる社会が始まっていく。
- ・IoTの促進も進んでいく。（※上白石萌音さんの政府広報動画（5年前の動画））

※以下のQRコードが政府広報の作成した動画です。よろしければ御覧ください（記録者追記）

↓ Full version（約5分）

↓ Highlight（90秒）



- ・PISA の調査による ICT 活用頻度スコアが主要国最下位⇒今後、学校教育に求められるものが変わってくる。

4. 実際に、学習で ICT を活用できる場面

学校 仕事の効率化（欠席連絡、学校行事アンケート、メール配信）Forms

※まずは学校の職務や家庭との連携から ICT の活用を進めていくといいのでは。

児童 道徳→「jamboard（ジャムボード）」の活用

国語→「俳句」句にこめられた意味やその背景に関わる内容の解説を共有

英語→音声の文字化機能によるネイティブの発音練習、スペルチェック（文字→音声）」

算数→問題の解法の共有

学活→スプレッドシート（≒Excel）の活用

総合→壁新聞を共同編集する

- ・思考ツールと ICT を組み合わせて、児童の思考の働きを手助けする
- ・共同編集による集団意思決定のプロセスを学ぶ（自己の考えの変容を即時共有できる）
- ・時間を超える、空間を超える、現実を超える

2. 質疑応答

| | |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 竹内 | 東久留米市では、市の方針により現在未だに児童用タブレット端末を一人一人持ち帰ることができていない。どのように対応していけばよいのか。 |
| 石出 | 国レベルでは、端末を持ち帰ることが基本的方針として示されており、持ち帰りを許可していない自治体は全国で公開されている。それにより持ち帰りができる自治体も増えてきているので、東久留米市もゆくゆくはそうなるのではないかと。 |
| 山中 | いわゆる「デジタルタトゥー」の問題をどのように捉えているか。 |
| 石出 | 情報モラル教育の推進、さらにはそこから一歩進んだ「デジタルシチズンシップ教育」の推進をより一層進めていかなければいけない。また、SNS の正しい活用の仕方についても学ぶ機会を設ける必要性は高い。 |

2 研究推進部から

<研究の内容について>

- ・講師の先生より ICT の活用方法として教材研究や事務処理の効率化についてもお話をいただいた。研究の手立ての一つとして取り組んでいくか研推でも検討したが、**研究主題との関連性を吟味した結果、今年度は中心的な研究内容としては取り上げないこととした。**

※知識技能の定着が期待される端末の持ち帰りやスキル学習についての取り組みは、研究以外のところで市教委と今後も連携を図っていく。

<端末のアカウント処理について>

- ・研推より、**今年度の在籍に対応した児童のアカウント一覧**の配布を行う予定。
- ・新1年生（必要があれば2～3年生）については、**パスワードのアルファベットを平仮名に置き換えた形**で児童に示せるように、研推より現在準備中です。

<TTTについて>

- ・TTTは、**原則として毎月第2・4金曜日に全校一斉に実施**する。
- ・どの程度タブレット端末を活用できればよいか児童自身が分かるようにする工夫を行う。研推より、例えばチャレンジカード（※）のようなものを配布し、各学級で活用する。

※1～3年生向け。3年生カードのゴールを「ローマ字入力ができる」程度の内容に設定する。

3 研究組織（研推内）

| | 分掌 | 内容 | 担当 |
|---|----------------|------------------------------------------------------------|----------------|
| A | 校内研究の運営 | ○三部会の司会進行 ○管理職や外部との連携折衝 | 水流 |
| B | 研推便りの発行 | ○決定事項や検討内容の校内周知 | 中島 |
| C | 家庭向け校内研究通信 | ○家庭に校内研究の取り組みが伝わるような通信の発行 | 中島 |
| D | TTT推進 | ○タブレットタイムの推進 ・各学年の内容調整（1年かけて） ・取り組みの紹介、校内共有 | 松田 渡部 佐藤 |
| E | タブレットに関わる保守・管理 | ○タブレットの保管や運用方法の校内統一化 ○タブレットの破損や修理に関わる窓口 | 副校長 松田 |
| F | 児童向けタブレットルール | ○タブレットルールの発行 ・内容の検討（1年かけて） ・印刷、配布 | 藤原 松澤 |
| G | タブレットスキル系統シート | ○児童に身に付けさせたいタブレットの活用スキルの系統化 ・内容の検討 | 本田 渡部 |
| H | 年度末・年度初めの移行処理 | ○年度末処理、年度初め処理 ・詳細は別紙参照 | 板場 松澤 |
| I | 児童アンケート | ○年2回の児童アンケート実施 ・校内研の成果と課題を、児童の実態調査から見取る。 ※Formsの活用推奨 | 本田 佐藤 |
| J | キーボー島のID管理 | ○児童用キーボー島のID管理 ・年度初めの学年移行処理 | 藤原 (小松) |
| K | ミニ研推進 | ○若手の先生方（本校が1校目の先生）を中心とした校内における指導力向上研修 | 中島 |

4 研究授業日程決定！

| | 6 / 1 | 7 / 6 | 9 / 21 | 12 / 7 |
|-------|-------|-------|--------|--------|
| 提案分科会 | 高学年 | 低学年 | すずかけ | 中学年 |

※日程については、恐れ入りますが講師の先生の都合により若干の変更がある可能性があります。確定次第、再度ご連絡します。

R 4 研究構想図（20220506 版）

<児童の実態と本校の課題>

- ① 自分の考えを表現したり、発表したりすることに自信がもてない児童が多い。
(児童アンケートより)
- ② 自分の考えをもったり、考えを深めたりする力が十分ではない。
(昨年度の研究より)

<社会的な背景から求められる資質・能力等>

- ①学習の基盤となる情報活用能力の育成
(学習指導要領総則)
- ②児童1人1台のタブレット配布など、急激に進展する学校現場でのICT環境整備への対応
- ③児童の発達段階や各教科の特質を考慮し、教科等横断的な視点をもった情報活用能力の育成 (情報活用能力#東京モデル：東京都教育委員会)



研 究
主 題

**思考したことを、豊かに表現する児童の育成
～ICT 機器の効果的な活用を通して～（仮）**

研 究
仮 説

ICT機器を効果的に活用すれば、思考を深めたり考えたことを適切に表現したりする児童が育つであろう。



| | 高学年分科会 | 中学年分科会 | 低学年分科会 | すずかけ分科会 |
|-----------|--------|--------|--------|---------|
| 目指す児童像 | | | | |
| ①思考を深める工夫 | | | | |

②表現を豊かにする工夫